

43 Tough構文

以下の例文 (1a, b) のように、主語位置にある名詞句が、意味上、不定詞節の目的語に対応している構文を一般に **tough構文 (tough-construction)** と呼ぶ。

(1) a. Mary is tough to please.

b. This book is easy to read.

この構文に用いられる述語は *tough*, *easy* などの「難易」を意味するものや *comfortable*, *unpleasant* などの「快・不快」を意味するものである。あるいは、 *a breeze*, *a cinch* などの名詞が使用されることもある。しかし、多くの場合は *tough*, *easy* などの「難易」を表す形容詞が述語として使用され、行為のしにくさ（しやすさ）を表すので、 *tough* という述語に代表させて *tough構文* と呼ぶ。

例文 (1a, b) のような場合、行為のしにくさ（しやすさ）は通例「誰にとっても」という総称的な解釈が与えられる。具体的に対象を明示したい場合は、以下のように for句を用いて表現する。

(2) This book is easy for children to read.

(2) の for children は **経験者 (Experiencer)** と呼ばれ、難易を経験する対象と解釈される。しかし、同時に、この for句は埋め込み動詞 *read* の意味上の主語であり、**動作主 (Agent)** の役割も担っている。行為のしにくさ（しやすさ）はその行為を行う人物にしか認識できないものであるので、難易の経験者と行為の動作主が一致するのは自然なことである。(2) の for句が難易の経験者であり、同時に埋め込み動詞の意味上の主語、つまり動作主でもあるという証拠は、以下のような文から得られる。

(3) *This book is easy for children for Mary to read.

(3) では、for children という経験者とは異なる行為の動作主 for Mary が埋め込み文に生じているが、これは非文法的である。(3) の非文法性から、*tough構文* では for句によって表示される難易の経験者は同時に埋め込み動詞の意味上の主語、つまり動作主でなければならないということが分かる。統辞的には (2) の for children は主文に属する前置詞句であり、埋め込み文の主語ではない。なぜなら、(2) の for句は以下に示すように、文中の他の位置に生じる（移動させる）ことが可能だからである。

(4) (For children,) this book is easy (for children) to read (for children).

これは for句が主文の前置詞句として一つの構成素を成しているため、他の位置に自由に生じる（移動する）ことが可能であることを示している。一方、埋め込み

文の主語である場合は、forは補文標識であり、主語はTの指定部位置に存在するので、それらは構成素を成さず、他の場所に生じる（移動する）ことができない（移動できるものは構成素に限られる）。

冒頭、tough構文は主語位置にある名詞句が、意味上、不定詞節の目的語に対応していると述べたが、このことが意味するのは、tough構文の埋め込み動詞は通常他動詞しか用いることができず、自動詞を用いる場合には前置詞が必要となるということである。例えば、以下の例を考えてみよう。

(5) *Tom is tough to work.

(5) はworkという自動詞が用いられており、主文主語のTomに対応する埋め込み動詞の目的語位置は存在しないので、非文法的である。主文主語のTomをworkの主語と解釈することも許されないということに注意されたい。(5)を文法的な文に変えるには、埋め込みの動詞をwork forという自動詞+前置詞の構造にすればよい。

(6) Tom is tough to work for.

このようにすれば、主文主語のTomは、意味上、埋め込み動詞work forの「目的語」と解釈することが可能なので文法的となる。

しかし、このように主文主語が埋め込み動詞の目的語に意味上対応していれば常に文法的なtough構文になるかというとそうではない。以下の例文を見てみよう。

(7) a. *The money was tough for John to lack.

b. *That expensive dress was easy for Mary to want.

c. *The hardcover edition was hard for the teacher to prefer. (Nanni 1978: 91)

(7a-c) にあるように、lack, want, preferなどの動詞はtough構文には用いることができない。これらの動詞に共通する特徴は**自己制御可能性 (self-controllability)**を欠くということである。つまり、動詞の主語が意識的にその行為をコントロールすることができないということである。従って、tough構文の埋め込み動詞は、主文主語に意味上対応している目的語を持つだけではなく、さらに自己制御可能性を持つ動詞でなければならないということが分かる。

(永盛 貴一)